

一二月三十一日 水曜日

今日は大晦日だ。一年が今日で終わる。 アンドレアのことが忘れられないが、それに終止符を打たなければならない。レーバンの翻訳を終え、自己満足を得たためか、この二三日わりとよく眠れた。それに勢い付けられ「アンナベル・リー」を日本語に直す気になった。

海のほとりの あの国の 僕のかわいい アンドレア引き離せない 僕らの愛 天使が恨む うつくしさ

という七五調の言葉がすべりだし、僕は自分の心のなかにアンナベルとアンドレ

アを交錯させていることに気がついた。ポーは言葉の魔術師だ。読んでいけば行くほど、彼の詩にほれてしまう。詩は亡くなった恋人に思いをはせていることになっているが、その思い出が蘇ると、恋人は生き生きとして臉に浮かんでくる。ああわかった、これは挽歌ではなくて、相聞歌だったのだ。妻の目を盗んで、ポーはこのような形で恋人に秋波を送っていたのだろう。僕は子供の時から、ポーは洞察力のある、理知的な作家だと考えていた。まったくそうなのだ。あの明晰で科学的な頭脳を使って、許されない恋を賛美し続ける。彼にあやかって、この大晦日に僕はアンドレアとの恋を楽しもう。明日新年がくればそれを海のかなたに投げ捨ててもいいが、今日はそれをゆつくり楽しむことにした。

一九五三年一月一日 木曜日

年頭にあたり、今年学業を成し遂げ、学習院にかえり、幸子と結婚し、これを妨げることを全力をもって除去することを自らに誓う。父母と幸子に年頭の書を書く。

このように武彦はアンドレアの愛の束縛から解放されようとし、成功したかのように見えた。元旦から三月二八日までアンドレアに関する記事は一切日記に見受けられない。しかしトスカニーニの音楽を聴くとその自己誓約が一挙に崩れてしまった。下は彼の日記だ。

三月二八日 土曜日

久しぶりにトスカニーニの演奏をきいた。ベートーベンのミサソレムニスには彼の手にかかると特別の力を持つ。テナー・ソプラノすべてが弦楽のように美しくなり、僕を幽玄の境地に連れて行ってくれる。

トスカニーニの実演をアンドレアと一緒にきいたのを思い出し、一度思い出すと彼女の思い出が怒涛のように僕の全身を襲ってしまった。アンドレア、すまん、すまなかったな。君に墮胎を薦めたりなんかして。

ミサはキリエ・エレイソン、主よ我を赦し給え、から始まる。僕も「主よ我を赦し給え」と唱えた。アンドレア、僕をゆるしてくれ。

翌朝朝食も取らずに、武彦は東六二街二七番地のアンドレアのアパートに行き、ベルを押した。前と同じ制服姿の門番が出てきた。「ミス・トムプソンに会いたいのですが」と言うと、「もうこちらにいません」とすげない目で迎えられた。「行き先の住所はありませんか」と聞くと、「伯母さんの許しを得てから、お名前は」と電話を取り上げた。それを見て武彦はその場から逃げ出した。昨晚アンドレアに手紙を書いてみた。「すまんことをした。ゆるしてくれ。胎児が生きていたら、今君の妊娠は誰にも分る形になって、八月には僕たちは父母として美しい赤子の誕生を迎えることが出来るのに」といった内容で、書いては破り、書き直してはまた破り、それが午前2時半まで続いた。目が覚めると無性にアンドレアに会いたくなり、身を整えてやってきたのだが、この始末。絶望のどん底に落とされた。

学寮には帰りたくない。足が自然にセントラルパークに向かっていった、日曜の朝なので、あちらこちらに新緑を楽しむカップルがいるだけで、閑散としているためか、いくら歩き回っても疲れを感じなかった。念頭にあったのはアンドレアに会ってもう一度彼女を抱きしめて「すまんことをした」と詫言をいれることだ。しかし、それはもう叶えられない。突然胎児は生きている人間ですよ、という言葉が胸に浮かび、それを拒否しようとするほど、「この真実を否定できませんよ」という声が強まってくる。だとすると僕は自分の子を殺した殺人魔なのだという自意識が台頭して、それが彼の半生を苦しめる素材となった。

嘉義の公園で父と散歩していた思い出がちらつく。武彦は小学校五年生だった。五つぐらいの子が迷子になって「母ちゃん、母ちゃん」と泣いていた。市長様の父がいくら聞いても泣きやまない。代わって武彦が「坊や、どうしたの」と聞く。「僕、母ちゃんにかくれんぼしようと言って、ここまで走ってきた。でも母ちゃんここに来ない。」武彦は坊やがどこから来たかをつきとめて、坊やを無事母親に返した。坊やの二つの目が嬉しそうに輝き、「兄ちゃん有難う」を何度も繰り返した。「武彦、弱いものを助けるのは家訓の一つ、よくやった」とずいぶん父が褒めてくれた。

アンドレアに墮胎をすすめなければ、やがて自分は自分の子を胸に抱いて、あのように美しい目の輝きを見ることが出来る。「弱いもの」と言えば、この世には胎児ほど弱い存在はない。公園の坊やは僕にして貰いたいことをはっきり言ってくれた。胎児にはそのような自由がない。折角生命へのスタートを与えられて、出生の日を心待ちにまっているのに、父母のどちらかの都合で、それが断絶されてし

もう。胎児の意思は完全に無視されている。少年時代の僕は「弱いもの」を助ける模範少年だった。成人としての僕は「弱いもの」を殺略する「殺人魔」に豹変していた。

コロンビアの人類学のある教授がフランスでは墮胎は重犯罪で、一九四二年に極刑をうけた女性がいたと教えてくれた。大戦中の異例な処刑で、一〇年前の事。彼はその一部始終を昨日起こったかのようによく覚えているという。アンドレアはパリに行って墮胎をした。危ないところだ。僕はそれを勧めた。すまん。僕は非人間だったのだ。

日曜の礼拝が終わって、公園に人出が多くなった。急に空腹を覚えた武彦は屋台店からホットドッグを買って、食べながらアンドレアと最初会った日のことを思い出した。その朝、彼はホットドッグを食べた後、カーネギーホールにいった。アンドレアが恋しい。その恋人をパリに追いやって処刑の危険にさらした。僕はごくつまらないエゴイストにすぎない。その自嘲の念を持ちながら、増える人並みを意識せずに歩き続けた。その夜寮に帰った武彦は微熱をおび、その後二週間、父母にも幸子にも一切手紙を書かなかった。

その前日、スタンフォード大学の小さなアパートでアンドレアは夫のアルフォンゾと一緒に同じ放送をきいていた。